



2年次に調査活動を実施した14人を代表して、イバラトミヨについて教えてくれた(左から)佐藤翔さん、佐藤拓真さん、小野広夢さん、小松鉄馬さん。

小さな魚が教えてくれた
遊佐町の豊かさ。

Cradle
高校生編集部が行く
スゴハイ 13
SUGOI high school students in Shonai
Supported by
庄内広域行政組合、山形県庄内総合支庁



写真提供：遊佐高校
庄内総合高校

取材テーマ

地域を通じ 未来を考える 高校生

遊佐高校

鳥海山の湧水が流れ込む遊佐町の清流、八面川。この川にすむ絶滅危惧種の淡水魚「イバラトミヨ」についての調査が、地元遊佐高校の2年生により続けられている。定期的に川に入りイバラトミヨを、一時的に捕まえ、体長や性別を調べ、水温など生息環境との関係性を中心に調査を重ねてきた。

美しい湧水にすむ、希少生物。
震災を経てより強くなった、友好町としての絆。
育まれてきた地域の誇りに触れ、
これからの生き方について考える
高校生たちを紹介します。

「アイディアも生まれた。「イバラトミヨへのダメージを抑え、かつ測定の効率を上げるため、写真とパソコンのソフトを使った、新しい測定方法を考えました。この方法を使って、後輩たちがよりよい調査をしてくれるといいですね」と翔さんは言う。



「緊張する」と言いながら、イバラトミヨのことをわかりやすく話してくれた。



(上)イバラトミヨは、このような水草を使って巣をつくるそうだ。(中)胴長を履き、イバラトミヨを捕まえる様子。(下)測定のため、一時的に捕まえたイバラトミヨ。(写真提供：遊佐高校)

4年目を迎えた2017年は、4月から8月にかけて9回調査を行った。イバラトミヨの体長は、わずかに3〜6cm。小さな体の絶滅危惧種を捕まえて測定を行うことは、簡単ではなかったという。「小さいので、そもそも網に入れるのが難しいんです」と小野さん。他の生き物ばかり入って、イバラトミヨが1匹も捕まらないときも1度や2度ではなかった。また、イバラトミヨは人の体温でもヤケド

残念ながらあまりいいデータが取れなかったそうだが、その経験から、来年につながる



こうやって調査したんですね。

取材：酒田東高校文芸部

庄内総合高校

友好町として力になりたい。そんな想いから、東日本大震災発生直後より、宮城県南三陸町の復興支援に町をあげて取り組んできた庄内町。その一環として庄内総合高校では、毎年3月に同町の志津川高校を訪れ、交流を深めてきた。



7年目を迎える今年、生徒会役員12名、JRC部* 7名、総勢19名の生徒が参加した。毎年、庄総生がプログラムを企画してきたこの活動。今年の交流は簡単なゲームから始まった。「行く前は少し緊張していましたが、担当したゲームの説明もうまくいき、楽しくてあっという間でした」と鈴木さんは振り返る。ゲームで緊張がほぐれた後は、ある文字を描くため一緒にドミノを並べた。「リハーサ



ルではあまりうまくいかなくて不安もあったんですが、本番は成功させることができて嬉しかったです」と池田さん。ドミノが倒れあわられたのは、「友」の字。実はこのドミノ、一つ一つに庄総の全校生徒からの手書きメッセージが入っていた。心のこもったプレゼントに、志津川高校の生徒たちはとても喜んでくれたという。その後、毎年恒例の花のプレゼント。少しでも南三陸町の経済支援になるようにと、現地で花の苗を調達し、一緒にプランターに植えて寄贈しているそうだ。



取材：酒田東高校芸部

後、毎年恒例の花のプレゼント。少しでも南三陸町の経済支援になるようにと、現地で花の苗を調達し、一緒にプランターに植えて寄贈しているそうだ。



(上・右)「友」の字になった、手書きメッセージ入りのドミノと、その製作時の様子。(左上)両校で協力して、たくさんの花を植えた。(左下)当時のことを思い、復興を願い手を合わせる庄総生たち。(写真提供：庄内総合高校)

志津川高校との交流の後は町の献花台を訪れ、当時のことを思い手を合わせた。その後、生徒・保護者・職員で募った寄付金を町長へ届け、震災当時のことや復興支

援を通じた両町の交流について話を聞き帰路に着いた。震災を経験した同世代との交流爪痕が残る景色、当時の様子を振り返る声。震災から7年という時間が経過した今、これらの経験は彼らの心にどう響いたのだろうか。「建物が新しく建ったり、川の土手が整備されたり、どんどんよくなっていく部分がある一方で、何もない場所も多く、復興はまだ途中でこれからも支援が必要なんだと感じました。自分にできることがないか調べて、しっかりと取り組んでいきたいと思いました」と奥泉さん言う。「父が自衛隊で、震災のときも現地で活動していたこともあり、人の暮らしや命を守る仕事に就きたいと考えるようになって



「親しみやすい人ばかりで、すぐに打ち解けることができました」。

りました。今回南三陸町を訪れて、その想いはより強いものになりました」と福原さんは力強く語った。彼らの心に芽生えた思いは、必ずやこれからの東北をつくる力になるだろう。
*JRC部：Junior Red Cross(青少年赤十字部)。さまざまなボランティア活動を行う部活動。

「友」として重ねてきた時間が東北の力になる。



今回交流活動に参加した、生徒会メンバー。(左から)池田尚幸さん(2年生)、鈴木智笑さん(2年生)、福原慎ノ介さん(3年生)、奥泉亜美さん(3年生)。

編集後記

私は遊佐町民なのですが、今回の取材ではじめてイバラトミヨのことを知りました。その生態について詳しく知るとともに、改めて遊佐の湧水の美しさを感じられるいい機会になりました。ノウハウや結果が受け継がれ、今後どのように調査が進んでいくのかとても気になりました。(りりか・酒東)

震災から7年が経ちましたが、まだ終わったわけではないと気づくことができました。直接関わることはできなくても、私たちにもできることはあるのだと庄内総合高校のみなさんに教えていただけてよかったです。これからも2校の関係が続いてほしいと思いました。(ともか・酒東)

編集部員&特ダネ まだまだ募集中!

「スゴハイ」の企画制作をやりたい高校生、「こんなスゴい高校生知ってる」「私、スゴいんです」などスゴい高校生の情報は随時募集中です。お気軽にご連絡ください。

ご応募・お問い合わせ先
Cradle事務局
info@cradle-ds.jp

編集・文=Cradle高校生編集部、工藤 拓也
写真=間 真由美
協力=遊佐高等学校、庄内総合高等学校、酒田東高等学校